

# 多摩川小景

2026年3月号

## 「三国志のよもやま話。意外と知られていない重要人物」

前々回の内容が「三国志」だったのですが、あれ以降妙に三国志スイッチが入ってしまいました(汗。動画を見まくったり本読んだり、まあそんな事ばかりしている毎日で御座います。そんなこんなで半分私の趣味になってしまうのですが(?)、今回もまた三国志ネタをお話してみようかと(笑)。

ただメジャーな曹操とか劉備とか孔明の話なんかは出尽くしてしまった感がありますので、今回は少し趣向を変えまして、「意外と知られていないけどかなり重要な人物」に焦点を当ててみたいと思います。

その人物の名は「羅憲(らけん)」、三国時代も終焉に近い頃の蜀の武将。実は彼、蜀の武将でありながらも蜀が滅亡した後の活躍の方が多い珍しい人物なのです。ではその彼の何が重要なのか、そこら辺を少し深掘してみましょう!!

羅憲は荊州(中国の中南部辺り)に生まれ、若い頃から儒学に対して博学であった事から「孔子の弟子の生まれ変わり」等と称賛されていた様です。やがて彼は官職に就く事となり、皇帝の付き人をしていたりしましたが、やがて軍人としてキャリアを積み重ねる事となります。263年蜀滅亡当時、永安と言う魏と呉と隣接した最前線に赴任しており、皇帝が降伏し滅亡した際にも遙か遠方に駐留していた事もあってか、正しい情報も入って来ない状態。3日後に漸く自国が滅亡した事を知り喪に服した直後、何と同盟国であった呉が援軍と称して事もあろうに攻め込んで来ました!!当然援軍と偽っている呉の行動は羅憲もお見通しであり、「重要な時に援軍も出してくれなかったクセに今頃援軍なんて送って来て誰が信用するか!!」と大激怒、彼は迫り来る呉軍に対して徹底抗戦で挑みます。

最初こそ士気も高く果敢に抵抗を見せたものの、やはり多勢に無勢。次第に量にモノ言わせて押し寄せてくる呉軍に押されて行き、苦渋の決断に迫られた羅憲は、何と自国を滅ぼした魏に援軍を乞う事となります。しかし蜀を滅ぼしたばかりの魏には当然そんな余裕はありませんでした。滅びた自国、援軍が来るかも分からない状況での勝ち目の無い籠城戦、「もはやこれまで」となる直前、実に籠城してから半年経った時に漸く魏からの援軍が到着、何とか呉との戦いに打ち勝つ事が出来、晴れて彼は魏の武将として新たな人生を歩む事となります。

そして蜀の滅亡から2年後、魏も禅譲と言う形で司馬炎に皇帝の座を譲り渡して新たに「晋」と言う王朝に代わる事になります。ある時、皇帝の司馬炎は「お前がイチ押しのお蜀の人物を教えろ」と言い、羅憲は何人かの蜀の人物を推挙、その中には「陳寿」と言う人物がおり、彼が史実の「三国志」を編纂、そして約千年後の明の時代に、物語である「三国志演義」が完成。そこから昭和の日本では「吉川英治三国志」、「横山光輝三国志」、平成になってから「天地を喰らう」や映画「レッドクリフ」が生まれました。

そう!!彼が陳寿を推挙したからこそ今の三国志があるんです、実は!!

歴史で「IF」を語るのは野暮ってモンですが、もし羅憲が呉との戦いで戦死していたら、もしくは呉に下っていたら今我々が手にしている「三国志」は全く別のものであった。もしくは三国時代そのものが埋もれてしまった可能性もあったりして、そう言う妄想が歴史の面白さでもあるんですね(笑)。

今回はこれまで!!



画像は三国時代末期、蜀が滅亡した後の勢力図 (wikipediaより引用)

劉備や孔明のファンでないとしても、これを見た時に悲しい思いに浸ってしまう三国志マニアは結構多いと思います。

嗚呼、国破れて山河在り。